

わがまち城東 その1

『本企画は、当紙の昭和60年2月10日発行号から昭和62年11月10日発行号まで33回にわたって連載されたもので、昨今は江東区の人口増大によって、江東区が大きく変貌していることや郷土意識が希薄になっている現状を踏まえ、先祖代々が築き上げたこの素晴らしい「わがまち城東」を再認識する意味で、再度連載することになったものです。』

江東区の足跡

郷土の歴史にはそれぞれの特徴があります。

天正18年（1590）徳川家康が江戸入府以前の江東区は、ほとんどの海浜にあしの茂っている低温地で人の住む土地と認める場所は少なかった利根川の本流が銚子に切り替えられてから、本格的な江戸の都市建設がはじまって、関西方面から続々とこの新開地に土地の埋立開拓に着手する人々が現れた。慶長（1596）のころ墨田区の南部から深川小名木川以北のあたりを開発した深川八郎右エ門はその1人である。

沖積地帯（流水のための土砂などが積み重なり生成した地層）がつつぎと埋め立て事業が行われ、自然の流れに配するに運河をもってして、しだいに今日の型態に発展してきた。

江東区の発展の条件としては、①大都市江戸市街に近い②埋立による広い土地が存在した③水運の便が頗るよい等があげられる。

これらの条件のもと、江戸時代には西部地域から市街地化するとともに、江戸川、中川、隅田川、船堀川、小名木川の五流による水運を利用して、木材、倉庫、問屋業が栄え、また江戸郊外の観光地、近郊農業地帯として発展してきた。

明治維新後、政府が殖産興業政策をとると前記の条件が要因となって、セメント、紡績、製材、鉄鋼、機械などの諸工業が発達し工業地帯として躍進してきた。

しかし昭和年代後半から公害が社会問題化すると共に、工場が転出し、その跡地に集合住宅が建設された。

私たちの住む江東区の町並みはおおむねこのようなあゆみをたどって、現在の姿になった。



現在の小名木川（丸八橋付近から）